

2012（平成24）第30回島根県音楽教育研究会大田市大会 上演台本短縮版

朗読音楽劇「琴の鳴浜」 脚本、歌詞―洲浜昌三 作曲―長坂行博

① オープニング

波の音（音楽）

朗 読 A	朗 読 B
浜に寄せる波の音。（音楽が重なり、緞帳が上がる。音楽に溶け込むように波の音は消える。） 波（音楽）の途中から朗読が重なる。 ※（ ）は場合によってはカットもある	白い海岸線が東西に伸びる山陰・島根 その細長い島根の中央に琴ヶ浜という海岸がある。 不思議なことにその砂の上を歩けば、どこからともなく琴の音が聞こえてくるという。 壇ノ浦で滅びた平家の姫がこの馬路の浦へ流れ着き、 助けられたお礼に奏^{かな}でた琴の音だという。 ここには800年前の話が今も語り継がれている。 海草をひろいにやってきたお種さんは、波打ち際へ打ち上げられている一艘の舟に気がついた。 不思議に思いながら近づいて行っただお種さんは思わず立ちすくんだ。 「…人…、人が倒れとる。おい、人が倒れとるぞ！おい、浜に人が打ち上げられとる。」 砂の上に一人の男が倒れ、舟の中にはきれいな着物を着た女性が琴を抱いて倒れていた。 「しっかりしなされ」「助けたげるけえな」「氣を確かに持ちなされや。」 村の人たちは二人を抱えて船小屋へ運んで介抱した。

歌「ここは石見 馬路の浜」

合唱

ここは石見 馬路の浜

洲浜昌三・作詞 長坂行博・作曲

嵐の浜に 打ち上げられた

さ迷う舟に 二人の命

さぞかし深い わけもあろう

もう泣かないで もうだいじょうぶ

ここは石見の 託農たくのの郷 馬路の浜

うみやま清くひと温かく 自然の恵に生きる村

朗読C

馬路にはこんな言い伝えが残っている。

むかしむかし、大国主命が出雲から船に乗って地方巡視の旅に出られた。邇摩の沖を過ぎると入り江になり、きれいな砂浜が見えてきた。大国主命はそれを眺めて、「うましところだ」と言われ、友ヶ岩でとも綱をとかれたという。

うましところ

洲浜昌三・作詞 長坂行博・作曲

歌「うましところ」

合唱

むかし むかしの そのむかし

いずもの きずき おおやしろ

おおくに めしの みことさま

うみからはまを はるかにながめ

うまし ところと のりたもう

うまし うるわし まじのさと

歌「いろは歌」

(1・33)

朗 読 B	うまし うるわし まじのはま
馬路の浜に流れ着いた二人は村人に助けられて浜辺の小屋へ住み、村に溶け込んで幸せな日々を過ごしていた。娘はいつの間にか、「お琴さん」と呼ばれ、男は「さん」と呼ばれていた。	
子どもたち	(遠くから)お琴さーん、お琴さーん。
春	こんどはあの歌あ歌うておくれや。
お 琴	どの歌？
子どもたち	いろは歌！
歌	いろはうた 日本の「いろは」より 作曲・長坂行博
	いろはにほへと ちりぬるを
	わかよたれそ つねならむ
	うぬのおくやま けふこえて
	あさきゆめみし めひもせず
	あさきゆめみし めひもせず
	(二度くりかえしてもいい。その時には二番は一緒に歌う)
こんどは新しい歌を教えておくれや。	
みやこの歌！	
綾	
子どもたち	都にはねえ、万葉集いうて、和歌を集めた大切な本があるの。
お 琴	人麻呂さんはねえ、その中で「歌の聖」といわれた人なんえ。

歌「わが振る袖を」

(1'05)

歌(お琴)

人麻呂さんはねえ奈良の都からこの石見にも来やはったこともあんのえ。

いわみのや たかつのやまの このまより

わがふるそでを いもみつらむか

鴨山の 岩根し枕^{まくら}ける われをかも

知らぬと妹が まちつつあらむ

朗読 A

村の人たちがいつの間にか集まってお琴さんの歌を楽しそうに聞いていた。
お琴さんは村に溶け込み、幸せな毎日を過ごしていた。

朗読 B

しかし、ある日のこと、邇摩の地頭と家来が平氏の落ち武者調べにやってきた。
鎌倉の頼朝は厳しい平氏追討令をだしていたからである。

「我が世を誇った平家は下関の壇ノ浦で滅びた。ところが、中にやあちこちへ

逃れた者がおる。この村へも平家の娘と家来が舟で逃げて来たという訴えがあった。

その者はどこにおる！」

村人の心の底に巣くっていた不安がいつきに現実のものとなった。その場はうまく逃れたが、
その夜、村の人たちは船を用意して、繁治郎とお琴さんをこっそり逃がすことにした。
村の人たちは浜辺で泣きながらお琴さんと繁治郎を見送った。

歌「美しい浜辺の村」

お琴の歌

歌「海よ見守りたまえ」

村人の合唱

「みなさん、ありがとうございます。このご恩は決して忘れません」

お琴さんは、離れていく舟の中で何度も何度も頭を下げてお礼を言った。

美しい浜辺の村

なにも見えない 暗闇の中に

ふと射^さしてきた ひとすじの光

そこには 温かい手がありました

何度ながしたでしょう 喜びの涙を

何度ながしたでしょう 感謝の涙を

ありがとう 忘れない 美しい海辺の村

ありがとう 温かい 笑顔の光

海よ、見守りたまえ

作詞・洲浜昌三 作曲・長坂行博

一、母なる海よ 大きな海よ

暗闇の海原^{うみはら}へ漕^こぎだした

二人の命を見守りたまえ

荒れ狂うことなく 穏^{おだ}やかに

大きく深い愛の波に乗せ

二人の願いを運びたまえ

朗
読

見送った時にはおだやかだった海は、夜中にかけて北風が強くなり、舟は激しく波にもまれた。そして次の日の朝、舟は浜辺に打ちあげられ、お琴さんは琴を抱いて息絶えていた。繁治郎はどこを捜しても見つからなかった。

村の人たちは、海を見下ろす小高い丘にお琴さんを丁重に葬った。

次の日、漁師が浜辺を歩いていると、どこからともなく琴の音が聞こえてきた。

「お琴さんの琴じゃ、お琴さんが琴を弾いてござらっしゃる！」

馬路の浜はいつのまにか「琴ヶ浜」と呼ばれるようになった。

ここは石見、琴が浜

二時は流れて 命めぐりて

潮風のなか なぎさ歩めば

遠くかすかに 聞こえるしらべ

あなつかしい やさしい響き

ここは石見の 砂の泣く浜

うみやま清く 人あたたかく

自然の恵みに 生きるむら

・鴨山の岩根し枕けるわれをかも 知らにと妹がまちつつあらむ

(万葉集2.巻 人麻呂の歌)

・石見のや高角山の木の間より 我が振る袖を妹見つらむか

(万葉集二巻132 人麻呂の歌)

・青駒の 足掻きを速み雲居にぞ 妹があたりを過ぎて来にける

(万葉集第2巻136石見相聞歌135の反歌 人麻呂の歌)

・小竹の葉はみ山もさやにさやげども 吾は妹思ふ別れ来ぬれば

(万葉集2.巻、233人麻呂の歌)

参考までに

- ・1184(元暦)2/7益田兼栄、兼高親子、頼朝の下知に応じ義経に従い一の谷の戦いで軍功をあげる。
- ・1184、5/梶原景時、下文を發し益田(藤原)兼高を石見の国押領使に任命する。
- ・1184、5/義経、石見の御家人らに下文を發し、兼高に従い平家の追討を行うよう命じる。
- ・1185、2/19義経、屋島で平氏を破る。
- ・1185、3/24義経、壇ノ浦に平氏を滅ぼす。安徳天皇入水。教盛、知盛死す。宗盛は捕らえられる。
- ・1185、1/29頼朝諸国に守護地頭を置き、兵糧米を課することを許される。
- ・1186、1/18頼朝の奏請により義経追討の院宣を下す。
- ・1187、2/義経、陸奥の藤原泰衡のもとへ逃れる。
- ・1189、4/30泰衡、平泉の衣川で義経を殺し首を鎌倉へ届ける。
- ・1192、7/12頼朝、征夷大將軍となる。

歴史に忠実に書いているわけではないが、大まかに歴史の流れに従っている。

参考図書・資料等(先人の著作研究に感謝して)

- 「仁摩町誌」「平家物語」
- 「琴が浜海岸」(琴が浜観光協会刊)
- 「ふるさとの方言集」(仁摩町発行)
- 「東いわみ物語」(石村勝郎著)
- 「郷土の歴史資料集」(大邇強研中学校社会科部会編)
- 「山陰のわらべうた」(酒井薫美著)
- 「ふるさとの民謡」(山陰総合企画発行)
- 脚本「琴の鳴る浜」(昭和55年邇摩高校演劇部上演 洲浜作)
- 琴ヶ浜盆踊り保存会作成の資料
- 馬路の方言集「言の葉馬」松浦和敏著
- DVD「琴ヶ浜盆踊り」制作・琴ヶ浜盆踊り保存会
- 撮影・編集 ドリームスタジオいしが
- 「柿本人麻呂 人と作品」中西進編 桜楓社
- 「郷土石見」各号 郷土郷土研究懇話会発行
- 平成21年3月30 音楽朗読劇として試作版30ページ脱稿
- 平成21年5月21 試作版を書き直して2稿脱稿
- 平成21年10月10劇として推敲し直し第3稿台本
- 平成22年1月08 出演者数名移動により書き直し4稿台本。
- 平成22年1月19 稽古中の変更や修正により第5稿台本
- 平成22年2月08 稽古中の変更を入れて第6稿台本
- 平成22年2月13 舞台上の変更や修正があり第7稿最終版
- 平成22年12月15 再演のために手直し第8稿
- 平成23年2月15 練習しながら手直し第9稿
- 平成23年9月 音楽と朗読用に手直し
- 平成24年7月 県音研大田大会発表用に手直し短縮